

2020/03/22

「神からの義」

旧約聖書のヨブという人物を通して、神の義とは何かを学びましょう。

ヨブについては、神様ご自身が、神を恐れる正しい人間だと言っておられます。

「ウツの地にヨブという名の人がいた。この人は潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっていた。」(ヨブ 1:1)

「こうして祝宴の日が一巡すると、ヨブは彼らと呼び寄せ、聖別することになっていた。彼は翌朝早く、彼らひとりひとりのために、それぞれの全焼のいけにえをささげた。ヨブは、「私の息子たちが、あるいは罪を犯し、心の中で神をのろったかもしれない。」と思ったからである。ヨブはいつもこのようにしていた。」(ヨブ 1:5)

「主はサタンに仰せられた。「おまえはわたしのしもべヨブに心を留めたか。彼のように潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっている者はひとりも地上にはいないのだが。」(ヨブ 1:8)

このように、神はヨブを義人だと認めておられたのですが、ヨブ自身は、自分について次のように語っています。

「ヨブは主に答えて言った。「ああ、私はつまらない者です。あなたに何と口答えできません。私はただ手を口に当てるばかりです。」(ヨブ 40:3-4)

「それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます。」(ヨブ 42:6)

神が義人だと認めておられるにもかかわらず、ヨブは自分を罪人だと言っています。なぜなのでしょう。

それは、神の義とは、正しい人間が受け取るものではなく、罪人が受け取るものだからです。ヨブは、決して謙遜してこう言っているわけではありません。罪人なのです。しかし、罪人であるがゆえに、神の義を受け取ることができるということです。「あなたは×ではなく○だ」と神が言うのですから、人はただその見立てを受け取ればよいのです。これが信仰です。ですから、神の義とは信仰で受け取るものだと聖書は教えているのです。

■どのような人が神の義を受けとることができるか

神の義を受け取ることができるのは、自分を罪人だと認める人、自分で自分を義とすることができない人、自力では自分を義とすることができないと知った人です。

実は、すべての人間が自分で自分をどうすることもできないのですが、そのことに気づかず、自分の力で努力すれば善い人間になれると思っています。そこで、神は、あなたがどうすることもできない罪人であることに気づかせようとなさいます。なぜなら、神の義は罪人

にしか適用されないからです。

「聞け。私はあなたに答える。このことでああなたは正しくない。神は人よりも偉大だからである。なぜ、あなたは神と言いつ争うのか。自分のことばに神がいちいち答えてくださらないと。神はある方法で語られ、また、ほかの方法で語られるが、人はそれに気づかない。

夜の幻と、夢の中で、または深い眠りが人々を襲うとき、あるいは寝床の上でまどろむとき、そのとき、神はその人たちの耳を開き、このような恐ろしいかたちで彼らをおびえさせ、人にその悪いわざを取り除かせ、人間から高ぶりを離れさせる。神は人のたましいが、よみの穴に、はいらないようにし、そのいのちが槍で滅びないようにされる。」(ヨブ 33:12-18)

神は、「私が答えないからと言って、あなたは文句を言うのか。私はちゃんと話しているのにあなたが聞こうとしないのだ。」と言って、ヨブを責め立てました。神に責め立てられて初めて、ヨブは自分がどうすることもできない愚か者だと気づいたのです。

私たちは、「世間から称賛される人間になろう」「仲間に気に入られる人間になろう」と、とにかく人から良く思われる人間を目指します。こうして、自分の力で自分を義としようとすることによって、「自分は正しく生きているのに。間違っていないのに。」とかたくなになり、人のことばも神のことばも聞こうとしなくなってしまうのです。しかし、人は神の義を受け取らなければ滅んでしまいます。そこで神は、私たちが虫けらと同じであると気づかせようとなさいます。それに気づいた人は、素直に神の義を受け取るようになるからです。

「主はあらしの中からヨブに答えて仰せられた。知識もなく言い分を述べて、摂理を暗くするこの者はだれか。さあ、あなたは勇士のように腰に帯を締めよ。わたしはあなたに尋ねる。わたしに示せ。わたしが地の基を定めたとき、あなたはどこにいたのか。あなたに悟ることができるなら、告げてみよ。あなたは知っているか。だれがその大きさを定め、だれが測りなわをその上に張ったかを。その台座は何の上にはめ込まれたか。その隅の石はだれが据えたか。そのとき、明けの星々が共に喜び歌い、神の子たちはみな喜び叫んだ。」(ヨブ 38:1-7)

「私が天地を造ったとき、お前はそこにいたのか。神に逆らうとはどういうことか考えよ。もっと神の前にへりくだれ。」と語られ、ヨブは自分の愚かさ、罪深さに気づきました。自分は無力で何者でもない知り、神の義に素直にしがみつくなことができる人こそが、神の目から見た正しい人間なのです。

新約聖書の中の手紙の多くを書いたパウロは、自分のことを「罪人のかしら」と呼びました。しかし、彼の行いは世間から見ると非の打ち所がないものでした。そのことを認めたくえで、パウロは自らを罪人だと言いつ、神の恵みなしには生きられないと、必死に神にしがみついたのです。

アダムとエバが、神が食べてはならないと言われた実を食べた時、最初アダムは罪を犯したことをエバのせいにし、エバは蛇のせいにしました。二人は、ただ「神様助けてください」と言えばよかったのですが、そうしませんでした。そこで、神はアダムとエバに何が起きるようになったのかを説明なさったのです。二人が死ぬのは罪を犯した罰ではありません。神が初めから「死ぬから食べちゃダメだよ」と言っておられた通り、実を食べたことに伴って自動的に死が入ってきたのです。その結果、病気や天変地異が起こるようになり、人間関係も縦の関係に変わり、神との関りも変わり、アダムとエバは汗水流して支え合って生きようになりました。この現実を知り、アダムとエバは神の前に砕かれ、神に助けを求めるしかない自分に気づきました。その二人に、神は動物の皮の着物を作ってあげました。

二人が皮の衣を受け取るとき、抵抗せず素直に受け取った姿こそ、神の義を受け取ることの原型です。神が私たちに衣を着せてくれるとは、神がすべての罪を覆ってくれることを表しています。アダムとエバは現実を目の当たりにし、自分の罪深さを知り、自力ではどうすることもできないと悟りました。神の義とは、このような自分は罪人だと知る者の上にあるのです。罪人だけが神の義を受け取ることができるのです。

■すべての人が神の義を受け取ることができる

「もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにあります。」（Iヨハネ 1:9-10）

「私には罪がない」という人の上に神の義はなく、自分が罪人であることを言い表す人には、神の義を受け取る資格があります。ですから、神は「ヨブは正しい」と言われたのです。そして、うれしいことにすべての人がその資格を持っていると聖書は教えています。

それは、次のように書いてあるとおりです。

「義人はいない。ひとりもない。悟りのある人はいない。神を求める人はいない。すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行なう人はいない。ひとりもない。」（ローマ 3:10-12）

私たちは自分が罪人であることを喜ぶべきです。すべての人は、「私も罪人だから、神の義を受け取る資格がある！」と喜ぶことができるのです。そのことに気づかせるために、神が私たちにお与えになったものが律法です。律法とは、「この律法を行うことができれば、自分で自分を義とすることができるが、行うことができなければ神の義を受け取るしかない」と私たちに教えるためのものです。

「すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスをためそうとして言った。「先生。何をしたら永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか。」イエスは言われた。「律法には、何と書いてありますか。あなたはどの本で読んでいますか。」すると彼は答えて言った。『心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』また『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』とあります。」イエスは言われた。「そのとおりです。それを実行しなさい。そうすれば、いのちを得ます。」(ルカ 10:25-28)

どんな人も、自分を排除して24時間神に仕えることなどできません。たいていの人は自分を優先して、余裕があったら神に仕えようとするものです。「時間があったら礼拝に行きます」「余裕があれば奉仕します」と言い、仮に礼拝を優先し奉仕ができたとしても、誰のことも平等に愛することができるかという、そんなことはできません。誰でもまず家族を優先するものです。

結局、すべての人が「なんと自分は罪深い人間か」という結論になるのです。自分の努力では自分を正しいとできない、神の律法を守ることにはできないと気づいたら、神のあわれみを受け取ることしかできないので、いのちを得ることができます。これが、「人にはできないが、神にはできる。」ということです。こうして、人は神の義を素直に受け取るものになっていくのです。

神は、私たちに神の義を無償で与えたいと願われましたが、私たちがそれを受け取らないから、律法を与えたのです。自分が罪深い人間だと知れば、誰でも神の義を受け取るようになるからです。

✕ 自分は罪人だと気づいていないサイン

1. 人を裁く

人の過ちを責めるとき、その人は、自分が人を責める資格などないことに気づいていません。

2. 自分を誇る

自分の生活や持ち物、能力などを誇るのは、自分が罪人であることに気づいていないサインです。

3. この世の楽しみに目が向く

砂漠でのどが乾いて死にそうだとしたら、必死になって水を探すでしょう。自分が罪深いことに気づいたら、なんとしても義を探すものです。この世で何か楽しいことを探しているうちは、自分の罪に気づいていないといえませんが、砂漠でのどが渇いてどうにもならない人は、エリマキトカゲを探して喜んだりはしません。

✕ 自分は罪人だと気づいた時のサイン

1. 裁かなくなる

2. 聞く耳を持つようになる

3. 自分に絶望する

自分に絶望することは、幸い中の幸いです。イエス様は、最初に語られたメッセージの中で「嘆き悲しむものは幸いである」と言われました。その人は神の義を悟り、まことのいのちの水を飲むようになるからです。そのことを教えるために、イエス様は次のようなたとえを用いられました。

自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこのようなたとえを話された。

「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりパリサイ人で、もうひとり取税人であった。パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』

あなたがたに言うが、この人のほうが、前の人よりも、義と認められ、家に帰って行きました。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」(ルカ 18:9-14)

「神様、私を助けてください。憐れんでください。」という祈りを本気ですることができたら、あなたの人生は変わります。

多くの方は、このことを知っていますが、実行していません。メッセージを聞いてわかっていますが、本気で求めたことはありません。今日、そのことに気づくなら、あなたは私の義を受け取ることができます。神の恵みはへりくだる者の上にあります。

■天の御国はパン種のようなものである

さて、神の義を受け取ると、実はそこから神の治療が開始されます。

「イエスは、また別のたとえを話された。「天の御国は、パン種のようなものです。女が、パン種を取って、三サトンの粉の中に入れて、全体がふくらんで来ます。」
(マタイ 13:33)

神の義は、私たちの中でパン種のようにだんだん膨らんで、私たちに内側から変えていきます。つまり、神の義を受け取ったら治療が開始されるということです。しかし、それは人間の努力によってではなく、神がしてくださることです。どのようなことが起こるのでしょうか。

1. 律法で罪に気づかせる

神に頼るように仕向けるため、神はあなたの罪を指摘するようになります。すると、以前にもまして自分の罪深さに気づくようになります。クリスチャンになってからのほうが罪責感が増すのは、御霊なる神が働きかけてこられるからです。

2. 徹底的に沈黙する

祈って計画したのにうまくいかなかったり、失敗する前に止められなかったり、神に祈り求めても、神が答えてくださらないときがあります。それは、あなたに自分の無力さに気づいてほしいからです。まだ余力があり自分の力を頼ろうとしてしまう人たちに、自分でやっごらんと神が促しておられるのです。自分は無力であり、何もできないことに気づかせようとして、あえて失敗することを通して、まことに神にゆだねることを教えておられるのです。神は私たちの内側にある傲慢や高ぶりを砕くために沈黙なさることがあります。

3. 霊のからだに変えられる

私たちのからだは、肉体の死と同時に霊のからだに復活させられます。こうして、私たちを苦しめていた死が消滅し、排除され、私たちの中から一切の死の働きがなくなります。傲慢も死の恐怖の結果であり、すべての罪の原因は死です。肉体の死を通して霊のからだに変えるというのが、パン種が膨らんだ様子なのです。

終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならないからです。しかし、朽ちるものが朽ちないものを着、死ぬものが不死を着るとき、「死は勝利にのまれた。」とするされている、みことばが実現します。

「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」
死のとげは罪であり、罪の力は律法です。しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあってむだでないことを知っているのですから。」（I コリント 15:52-58）

私たちを苦しめる原因である死を取り除くこと、これが神の義です。神は必ずこれを成し遂げてくださいますから、何も心配する必要はありません。ただ、神に目を向けて生きていきましょう。神の義を受け取り、神を見上げることによって、私たちは砕かれ、この地上での平安を得ることができます。